

, 1999.

中山 弘 正

(国際平和研究所所員)

『帝政ロシアのエネルギー論における石油と石炭・国際比較』という題である。

著者のイリ・ナ・ディヤコノヴァ氏については、12年も前に1度明治学院大学『経済研究』に紹介したことがある。⁽¹⁾ 日本語が、彼女の修得した第14番目の外国語であるにもかかわらず、拙著なども次々と読破し、ロシア語の雑誌に批評を載せたりされる方で、⁽²⁾ 日本のロシア史研究者にとっては大変貴重な存在でもある。

2001年7月に、プロジェクト「市場移行と平和」の一環としてPRIMEでお招きし、その時の講演の記録が『PRIME』第15号に掲載されている。⁽³⁾

氏には実に多数のロシア語以外も含む論文があるが、単著はこれで2冊目かと思う。⁽⁴⁾

本書の構成は次のようである。

第1章 諸史料と諸歴史家たち

第2章 ロシアの石油・石炭エネルギー論

第3章 需要面からのロシア燃料・エネルギーバランス

付録1 帝政ロシア石油産業のアウトサイダー

付録2 帝政ロシア冶金産業の外国資本

人名索引まで入れて、294頁。

付表と付録とが163頁から始まっているので本文は約55%、あとは史料そのもの、という如何にも経済史の本である。本書の研究史上の位置づけを知るためには、少なくとも近年わが国で出版さ

れた帝政ロシア期の経済に関する3冊が踏まえられねばならない。(1)中山弘正『帝政ロシアと外国資本』岩波書店、1988 (2)富岡庄一『ロシア経済史研究』有斐閣、1998 (3)伊藤昌太『旧ロシア金融史の研究』八潮社、2001。とくに(1)はロシアの産業部門別の分析を含み、本書の扱う石炭、石油に関しても関連研究を示してあるので、研究史の流れもとらえられよう。少なくともこれらの延長上に本書を置くならば、以下に紹介するように、本書は、石炭と石油というエネルギー関連2部門をたえずワンセットで考え、国際比較もその点を重視したこと、また、帝政期のみならず、ソ連邦期、新生ロシア期まで一貫して扱ったという点で独特の意義をもったと考えられる。以下、具体的内容に沿って考えていこう。

第1章。19世紀～20世紀初頭のロシアの石油・石炭に関する統計がこの研究の基礎になっているが、それらは他の諸国のものと比較してもしっかりしたものである。石炭などは1859年から毎年詳しい統計が公表されていた。全体統計と企業別統計もある。石油の方は1886年には企業家連合もできていた。『石油業』といった定刊誌も出ていた。米英独などとも比較しつつの研究なので、各国の統計についても詳しい検討がなされていく。ロシアの石炭なども、南部とかポーランドなど地区別にもいろいろのものが出されていくことが示され

る。石油はふつうバレルを単位とするが、これに石油の比重と15.625%を掛けるとトンに換算される、すなわち、1トンの石油は6.4バレル（掛ける石油の比重）である⁽⁵⁾ といったこと、石炭なども含むエネルギー単位換算にも頁を割いている。ロシア・ソ連では石油はトン単位表示の方が多いからであろう。評者の『帝政ロシアと外国資本』（1988）でも使ったペルシケ（1913）⁽⁶⁾ を初め、英独仏米などの研究者の成果を比較紹介しつつ、この時期の「国際比較」はかなり正確に出来る、と確認している（22頁）。例えば、石油に関しては、アメリカと比較し、1902～1917のロシアは生産がひどく落ちた、といった問題なども後に内容が詳しく追求されていく。ロシア革命後、1920年代にもロシア石油について「10月革命までの15年、10月後の10年」といったものを初めいくつかの研究があったことや、1930年代にも有名なリヤシチェンコ（『ソ連邦国民経済史』（露）1939）などがあり、戦後もヴォロブーフ、ゲフチェル、ボヴィキンらと続いた研究史が検討されていく。1970年代はソ連で石油の空前の増産が行われたわけであるが、エネルギー全体の中でのその比重なども後に詳論されていく。

第2章は帝政期ロシアを扱う。1880年に、世界の産炭3億6,140万トン中、ロシアは2,570万トン（7.1%）に止った。第1位イギリス1億4,930万トン（41.3%）、第2位アメリカ7,170万トン（19.8%）、第3位ドイツ5,910万トン（16.4%）にロシアは次いでいたのである（40頁）。1859～1913年の米口の採炭量増加の対前年比（いずれも、ほぼ105～115%前後）、同期間の米口の採油量の対前年比が表示される。米口の石油での競争は、アメリカ石油が1860年代にもロシアに輸入されていたものが、ロシアのノーベリ社の成長で、1873～1883年に輸入が5分の1に減る（52頁）などといった形で、ロシア国内市場をめぐり厳しかった。また、原油からの燈油の抽出が落ちる（バクー、

1889年30%から1900年20%）といった問題、石炭では、ドネツク坑での増産（1880～1913に140万トン～2,528万トン）とモスクワ近郊炭の減少（同、40万～30万）等も検討されていく。1890年代の好況期、経済高揚の中で、ロシアは、原油で1900年には、884万トン産出のアメリカを抜いて、984万トンにも達していた（65頁）。石炭では、米口は、1900～1913に2億4,472万トン～5億1,720万トン対1,616万～3,598万トンと大きくロシアは水を空けられていたのであるが。著者は、重量でみて、石炭と石油の「比率」に注目する。ロシアは1900年に1.64：1、1913年は3.92：1で、アメリカの27,687：1、14,987：1とは異なることを強調している。バクー油田がこの間にも油井の増加をみながら月平均採油度は落ちていたこと、油井も深くなっていたことなども指摘されている。アメリカについても、東部から西部へ産油地域の比重が移っていたことなどが述べられている。1913年には、石油でも、米口は世界生産の65%対16%と差がついていた。[ロシアの1900年恐慌と08年までの不況の影響が大きかった。拙著参照]

第3章は本書の中でも最も長い章であるが、じつは後半は「結語に代えて、歴史の若干の教訓と現代」であり、ソ連邦崩壊後の現状にも論及している。前半では先ず種類別に「需要から見た燃料・エネルギーバランス」（1900年及び1908年）が表示される。例えば金属産業が石炭需要の33%、52%を占めていた等々のことである。また地域（13に区分）ごとのエネルギーバランスや工場、鉄道、船など種類別需要のバランス、それらと関係のある石炭・石油のコスト、その中での労賃コスト（112頁～、石炭業の方が賃金比重が大きいなど）、石炭と石油の競争等が述べられていく。後半では、1917年の革命後のロシアの石油・石炭問題、それらへの固定投資、貿易などが、1920年代から少しずつ現代へと述べられ、この間の諸エネルギー源の比重、コスト、労賃コスト、労働生産性などが

詳しく検討される。1970年代には、世界のエネルギーバランス全体では、石油が40%、石炭30%弱なのであるが、ロシア（ソ連）も40%、35%位なのであった（152頁）。この「現代」に入ったところで、評者の「ソ連邦における石油問題」⁽⁷⁾などもかなりとり上げられているが、これは、論点としてすぐ後でふれることにしよう。

以上、かいつまんで本書の内容を紹介したが、本書は帝政ロシア期からソ連邦期にわたる経済史の研究成果として大変優れた、興味深い作品である。がそれだけではなく、ソ連邦崩壊後の新生ロシア連邦の経済研究にとっても、極めて重要な位置を占めることが明らかであろう。

何故ならば、一時1998年に対外債務の支払不能にさえ陥ったロシア連邦の経済が、ここに来て財政黒字、外貨準備高増（2001年 360億ドルに）、失業率の改善（2001年 8.8%に）など「好調」とされる背景には、石油輸出が大きく貢献しているからである。すなわち、今日のロシアにとって、石油（に代表される鉱業品、天然ガス等も含めるとひとまわり大きくなるが）は最大の世界市場商品なのだからである。

新生ロシア連邦の10年にも、原油生産量は約3億トンが維持され、その輸出量も、1.1億から1.4億トンと伸び、輸出額は、単価の高低の影響が大きい、100～150億ドル、2000年には252億ドルで「現在のロシアにとって最大の外貨獲得手段の1つ」⁽⁸⁾である。バレル当り、1994 - 99年単純平均17.15ドルであった原油輸出価格は、2000年 28.3、2001年 23.0ドル [2002年10月現在30ドルに接近] とかなり高水準になっているのである。石油製品、天然ガス、等を入れると、輸出総額中、1999年 44.9%、2000年 53.8%と大きな比重を占めている（アルミニウム、コバルト、ニッケル等「金属」が26.1%、21.6%で、これも併せるとロシアの鉱物資源は輸出の4分の3を占める）⁽⁹⁾。

こうした状況は、ロシアでも、「ロシア経済はパイプラインの上に坐っている」と表現されることがある、とエレナ・レオンチュヴァ氏は、PRIMEの招聘講演で述べた（2002年6月28日）⁽¹⁰⁾。

かつて、帝政ロシアは大規模に外国資本を導入するに当たって、ほとんど専ら「穀物輸出」で帳尻を合せていく必要があった。もっぱら「クロップ」に外貨獲得を依存したのである。ソ連邦期の1970年代、オイルショックを奇貨とし、ソ連は石油を大增産、輸出し、外貨を数千億ドルも稼いだと見られるが、そのため、輸出構成の中で石油を中心とした「エネルギー輸出」は、急増し、その過半をなすにいたったことがある。拙稿・注（7）は、1980年代前半までのこうした状況を論じたもので、上の状況をM・ゴールドマンが「One Crop Trade」と皮肉っていることも紹介している。イリーナ・ディヤコノヴァ氏は、この拙稿をかなり詳しく紹介しつつ（153～159頁）、現ロシア連邦の「ワン・クロップ・エコノミイ」の経済構造の問題点を明らかにしているのである。われわれの共著でも、上垣彰氏が指摘しているように、対外債務、為替相場動向などとともに、石油価格の動向がロシア経済のゆくえの鍵を握っている [注（8）、109頁] とすると、その土台は磐石とはとうていいい難いであろう。

本書は、こうして、現代ロシア経済にとって、極めて重要な石油問題を研究する上でも貴重な作品であろう。いうまでもなく現在の石油業は、帝政ロシア期、ソ連邦期のその歴史的積み上げの上に成立しているからである。

本書が重視している石炭との「バランス」という [さらには他のエネルギー源とのバランス] 問題を少し脇に置いてしまった。石炭については、この9月モスクワを訪れた際 [9月2日 - 14日]、未だに大規模に「森林火災」が残り、そのスモッグで市民が悩まされるほどであったが、それが「泥炭」火災であったことを想い出す。⁽¹¹⁾ 本書の

帝政期のところから顔を出す「モスクワ近郊泥炭」(59 - 60頁他)の現代性をあらためて想わされた。

註

- (1) 拙稿「帝政ロシアと外国資本 ()」
氏の近業をめぐって」明治学
院大学『経済研究』第88号、1990. 11. ここに
は拙著『帝政ロシアと外国資本』岩波書店、
1988. の書評 (“ CCCP” 1990 - 2)
の全文も収録した。
- (2) 筆者の英語論文 “ Science and Technology before
and under Perestroika” PRIME, 1991. “ The
Military Context for the Disintegration of the
USSR” PRIME, 1992. のほか、拙著『ロシア
擬似資本主義の構造』岩波書店、1993. など
を取り上げて「中山弘正教授の諸研究における現
代ロシア (.)」という評論を
“ ” 誌、1994 - 8 に掲載。
- (3) Irina Diakonova, Russia - Ten Years of Market
Economy. 明治学院大学国際平和研究所『PRIME』
No.15. 2002. 3.
- (4) ,
. ,
1980. が第1作。
- (5) 杉浦史和・大坪祐介・二村秀彦・金野雄五『ロ

シア経済10年の軌跡 市場経済化は成功したか』
ミネルヴァ書房、2002. 9. 25頁、図1 - 6では、
1トン=7.3バレルとしている。

- (6) ,
. ,
1913. 拙著『帝政ロシアと外国資本』1988. 文献
118.
- (7) Hiromasa Nakayama, Oil Problem in the USSR.
“ Japanese Slavic and East European Studies.”
1985. Vol.6.
- (8) 注(5) 共著、24頁。中山弘正・上垣 彰・栖
原 学・辻 義昌『現代ロシア経済論』岩波書
店、2001. 6、108頁も参照。2000年の輸出総額
は949億ドル。
- (9) 拙著「ロシアにおける再資本主義化の発展」明
治学院大学産業経済研究所『研究所年報』第19
号、2002. 12.
また拙著『現代の世界経済 地球帝国アメリカ
の興亡』(仮)2003、岩波書店、第8章。
- (10) 注(9)の2拙稿でもふれる。
- (11) 森林火災が、根を伝わり泥炭火災となり、泥炭
層が燃え出すと消防車など車ごと落ち込む危険
もあるという。30年ぶりだとのことであるが、
飛行機から水まで撒いていたし、「テロ」説、
「アメリカ謀略」説などもとびかっていた。